

< 随想 >

コミュニケーション学科の誕生まで

植村 勝彦

その日、1985（昭和60）年10月30日は、全国の短期大学に初の、わが愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の誕生に向けて、僕に確信と勇気と、さらには一種の闘争心を与えてくれた日であった。

夕方5時近く、文部省3階の、薄暗いA会議室で始まった聴聞会、つまり大学設置審議会による「大学等設置認可申請に係る説明聴取」は、わがコミュニケーション学科の設置の趣旨、必要性、および基本構想などについて、文部省に説明し、質疑に答えるもので、設置審側は大学の学長クラスの4委員、学園側は小林素三郎理事長・学長以下6名であった。席上いろいろな注文、苦言もついたが、学科の基本構想を説明した僕に対し、主査を務められた久野 洋委員（慶応義塾大学教授）は、好意的な評価を下した後、次のような発言をされた。「このカリキュラムが、大学院修士課程のためのものなら、双手を挙げて賛成しよう。しかし、高校を出たばかりの者に対してでは、消化不良をおこさせはしないか。何を学んだか、じゅうぶん理解しないで卒業することになりはしないか」というものである。この一言は、それまで、短期大学におけるコミュニケーション学科のあるべき姿と目指すべき方向について、いまひとつ自信がもてず、絶えず不安に苛

まれていた僕に、このうえない励ましであった。つまり、わが学科の基本構想が、学問領域の異なる専門家にも理解されうる一般性を持ち、ひとつのまとまりをもったカリキュラムの体系をなしていると判断され、オーソドックスな教育・研究を志向していると認定されたからである。短大という性格上、目新しく楽しそうなメニュー（科目）を総花的に並べるほうが学生が喜ぶのではないか、科目の構成が研究志向的に過ぎるのではないか、心理学に偏り過ぎてはいないか、などなどと思い悩んできたこれまでに、今日で終止符が打てる。あとは、学生に消化不良をおこさないように講義や演習のスタイルを工夫することだ。スタッフ全員で、これに挑戦していこうではないか。これが、その時の偽らざる心境であった。学科開設に先立つこと1年半前の出来事であった。

今、これが成功しているかどうか、についての自信はまだない。残念なことに、僕に勇気を与えてくださった久野先生は、今年（1988年）5月お亡くなりになった。一期一会というけれども、僕の胸に強烈な印象を残して逝かれた、先生のご冥福をお祈りするものである。



愛知淑徳短期大学にコミュニケーション学科が設置されるきっかけになったのは、1985（昭和60）年が学園創立80周年に当たり、その記念事業の一環として、大学には図書館情報学科を（1985年4月開設）、学園全体としては記念会堂を（1985年11月竣工）、短大にも学科の新設をということで準備委員会ができ、1984年5月21日に第1回の会合が開かれたと聞きおよんでいる。コミュニケーション学科という名称が、どのような経緯で決定されたかについては詳らかには知らないが、大学の新学科との関連で、その短大版をというニュアンスが当初あったような話を、準備委員長であった英文学科の小野迪雄教授から伺ったことがある。

ところで、名古屋市をはじめ、政令指定都市にある大学・短大では、学生数の定員増は認められないという法令がある。この制限の中で新たに学科を創るには

既存の学科の全面改組か、部分改組つまり定員の一部を新学科にまわすしかない。そこで本学では、家政学科の定員を削減して（300人⇒200人）新学科を創り、4学科構想を実現することにしたということであった。

僕に「学科創りをしないか」という誘いの電話がかかってきたのは、確か1984年の7月だったと記憶している。僕は当時、愛知県心身障害者コロニー・発達障害研究所、社会福祉学部・地域福祉研究室長という職にあって、いわゆる“知恵遅れ”の子供を持つ家族が被る心理・社会的ストレスの研究に従事していた。電話の主は、1年前まで同じ職場にいた先輩で、慶応大学教授に転出したT氏からであった。彼によれば、学園側から学科創設主任者の推薦の相談をもちかけられたので、「未熟かもしれないが現役のバリバリがよいから、国立大学を定年退官したぐらいの安全確実な人が

よいか」と問うたところ、「前者がよい」とのことだったので君を推薦した、というものであった。白羽の矢をたててもらったことは光栄であったが、今の仕事とはずいぶん違う内容なので、一夏悩み考えた。その結果、学科を創設するというような役割は願っても与えられるものではないし、新しい仕事に挑戦するには年齢的にも最後のチャンスだろう。そしてまた、これもなにかの因縁かもしれない、と感じて決断したのが10月初旬だった。

因縁というのは、僕の尊敬していた伯父が、小林素三郎学長の小学校時代6年間持ち上りの担任教員で卒業後も、伯父の死ぬまで半世紀以上も同級会が続けられ、死後、学長が中心となって追悼集（「一力二力三力」）まで編まれるという、稀にみる麗しい師弟関係が続けられていることを、ずっと以前より知っていたことである。小学校時代の恩師をこれほどまでに選

してくださる人に、親族の一人として感謝していたしこの人に自分を託してみるのもよいかもしてない、と一種の賭をしてみる気になった。生前、「淑徳なら、口をきいてやってもいいぞ」と冗談半分に言われていたことが、こういうかたちで現れようとは、縁とはこういうものをいうのかも知れない。

ともあれ、決断した僕はT氏にその旨を伝え、1984年11月10日、学長をはじめとする学園関係者と千種の愛知会館で初めて会い、正式の依頼を受けた。学科の構想をはじめ、担当教員の人選に至るまで、一切を任せるというものであった。ここに、それまでの準備委員会は解散し、以降、僕に委ねられることになったわけである。42歳の若輩の身に、言い知れぬ不安と興奮が襲ってくるのを、どうしようもなかったことを覚えている。



それからの4ヶ月は、本当に必死だった。卒業論文の製作に熱中していた18年前の大学生だった時以来、あれだけ根つめてひとつのことに集中したのは記憶にない。

短期大学の学科は、大学の学部に対応しており、新設のための審査には2年を要する。大学の学部学科を新設するには1年の審査でよいが、短大に学科を創るには2年かかるという、この一見矛盾する大学設置基準のために、1987年4月開設を目指す、わが愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の設立準備のための期間は、わずかに8ヶ月を残すのみであった。すなわち、1年目の審査を受けるために、1985年7月31日までに申請書類を文部省に提出しなければならない。そのためには、3月末までに、文部省の担当官（高等教育局企画課）との間の、予備審査とでもいうべきものに通っていなければならない（本審査は、大学設置審議会という、文部省が委嘱する委員会が行うのだが実質は文部省が握っているので、この予備審査に合格しないことには、本審査でうまくいくことはありえない）。

こうした状況の中で、今年（1984年）中に一度素案を持って、文部省の担当官のところへ、事情説明と意見聴取に行きたいという学園側の意向に副うべく、11月30日までに作文することとなった。学科創設主任の依頼を受諾してから、わずか20日間の猶予期間であった。この時点で、僕の手元にあった資料は、学園が、

この年6月に文部省に最初の打診をするべく、準備委員会が作成した案文「愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科（情報学科）設置について」というもののみで、作文の書式はこれに従いながら、中身はまったく僕の独断的思想からなる学科構想をスケッチしたものであった。

12月4日、学科設置の趣旨、学科の特色、カリキュラムの概要をワープロで打った素案をもって、小林素文・学園本部長（当時）、安藤哲夫・短大事務局長の2人が文部省に出向いて行かれた。この時の担当官とのやりとりのメモが、安藤氏によって事務用箋3枚に残されているが、ずいぶん注文をつけられてはいるものの、基本線では承認を取りつけている。最大のポイントは、“これがコミュニケーション学科だ、というものを前面にうちだすこと”であった。このメモに沿って、主に学科の特色を手直した案を持って、再度12月26日出向いたが、ここで、年明けの次回までの宿題ということで、次の3つの課題が科せられたのであった。

第一は、学科の名称。文部省側は、カタカナ名称を非常に嫌っていた。日本語名称か、あるいは、せめて「コミュニケーション」の前に日本語を冠せた名称（例えば、人間コミュニケーション学科）にするようにというものである。

第二は、既存の類似学科との対比、相違点、特色。この時点で、コミュニケーション学科と名のつくもの

は、四年制大学に常磐大学人間科学部コミュニケーション学科があるのみで、短期大学にはもちろん存在していなかった。ただ、南山短大の人間関係科をはじめ広報学科、マスコミュニケーション学科など、類似の名称のものがあつた、それらとの違いを明確にせよというものである。

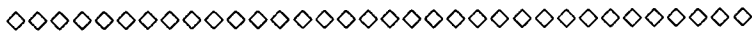
第三は、学科の枠組み、コミュニケーションの定義づけ、学科の到達すべき狙い、カリキュラムの分類と構想、卒業生の進路・資格など、を明示せよというものである。

これが本当の意味の作文の試練だと直感した。学園側の、年明け早々の1月7日に原稿が欲しいという要求に、それからの10日間はそれこそ寝食を忘れての、無い知恵を搾り出して苦しんだ毎日だった。この時、僕はまだ愛知県の職員で、公私混同もいいところであったが、元旦恒例の研究所の所員挨拶会もそこそこに正月休みを返上して、毎日研究室で夜10時頃まで頑張っていたことを思い出す。この公私同居の二重生活は1986年4月に僕が短大に着任するまで、まだ1年以上も続けられることになる。今でこそ明かせるが、このコロニーの研究者としての本来の職務を十全に遂行しない行為で、県と研究所にはずいぶん迷惑をかけたことを申し訳なく思っている。

ともあれ、苦心惨憺して作りあげた原案は、学園側との協議で微修正され、さらに、その他の必要書類も整えられて、1985年1月24日再三度提出された。この原案は、ほぼ現在のコミュニケーション学科の骨格を現しており、したがってまた、これによって学科開設への目途もついたことになる。カリキュラムについては、常磐大学のそれを主に参考にさせてもらった。その後3月までに、まだ数度文部省との折衝が行われたが、基本線はほとんど変わっていない。この間の最大

の焦点は学科名称の件で、学園側が、名称変更はそもそもその学科設置の趣旨にもとるとして、頑として説得に応じない姿勢をとりつづけたために、文部省側が折れたものである。僕としても、努力が報われた気がして本当にうれしかった。そして、このコミュニケーション学科は、教養学科に準ずるものとして位置づけられることとなった。つまり、これによって専任教員定員8人（うち3名教授）、図書5000冊、雑誌25種類などの最低基準が課せられることになった。

こうして、3月までに、どうにか展望を拓くことができたが、気持ちに余裕ができたたたん、思わぬ伏兵が僕を待ち受けていた。3月初旬のある夜半3時頃、余りの痛みに目が覚めた。腋から背中一面に激痛が走り、寝返ることはもちろんのこと、体を動かすことすらできない。夜中に家族を起こすこともはばかられ、脂汗にまみれてそのままの姿勢で夜を明かした。朝、家内に背中を起こしてもらってどうにか立ち上がり、激痛をこらえて出勤する。しばらくすると痛みは和らぎ正常にもどって、日中は通常通り仕事をこなす。その夜、運動による単純な筋肉痛かと思い、風呂で体をよくほぐして寝ると、再び夜中に激痛で目が覚める。この繰り返しが1ヶ月ほど続いた。内科の病院を二、三軒歩いたが、どこでも血液を200ccずつとられ、また尿検査をしてくれるものの、原因不明で診断は下らず、拳句は、力士が貼っているような巨大な湿布薬をくれるだけであった。そして、またある朝、忽然と痛みはひいていた。狐につままれたような心境だった。後から思ったことだが、神経性の筋肉痛で、これが世にいう心身症というヤツかな、と勝手に納得したようなことであった。ストレスのかかっている最中ではなく、タイム・ラグをおいて現れるものらしい。ともあれ、忘れることのできない“痛い”思い出である。



話を12月に戻そう。文部省向けの作文に取り組む一方で、僕は同時に、専任のスタッフの人選にも取りかかっていた。自分が心理学の出身で、もっと正確に言えば、心理学しか知らない以上、このコミュニケーション学科の性格を、心理学をベースにしたものとして位置づける構想は、引き受ける当初から密かに持っていたので、カリキュラム案も自ずとその色彩が濃いものであった。ただ、専任スタッフの全員を心理学出身者で固めてしまうことの可否については迷いがあり、8人の専任スタッフの内2人はメディア関係の人とし

て、僕の知らない領域なので、その人選は学園側に一任することとした。

残る6人を心理学出身としたが、この時点でこの学校に専任としておられたのは、一般教育で心理学を担当していた山田洋子先生ただ1人だった。それに、予定者としての僕を加えると、4人の人選が必要となる。山田先生には、学科創設の話を引き受けた直後から相談相手になってもらっていたので、1人の人選をお願いした。それが、当時、名大文学部の博士課程後期1年在学中の松尾貴司氏であった。彼とは1985年4月に

彼の指導教官であるT教授の研究室で初めて顔を合わせた。学部時代、アメリカン・フットボールをやっていたという、いかにも馬力のありそうな好青年であった。

僕はといえば、もう12月初旬の段階で、2人の人を頭に描いていた。永田忠夫先生と新美明夫氏である。永田先生とは、名大教育学部で同期の助手を務めて以来の15年来の研究仲間であり、僕にはないものを沢山持った素晴らしい人物であることを、常々羨んでいたほどであったので、彼の協力を真先に頼んだ。当時、彼は愛知県立看護短期大学の助教授であったが、大学が冬休みの直前のある日、コロニーとはJR中央線高蔵寺駅を挟んで反対側に位置する彼の学校へ行き、電話でも来訪の目的も告げずに来た僕をいぶかしがる彼に、いきなり「今日は、君を買いにきた」と研究室へ入るなり言ったことを思い出す。

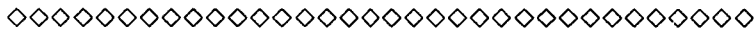
一方、新美氏は、僕とは同じ研究室の同僚で、この10年間、2人でペアを組んで同じ研究を続けてきた間柄である。京都大学を卒業して愛知県の職員となった彼が、配属されてきたコロニー研究所での入所当初は先輩面をしていろいろ指導したこともあったが、出藍の誉れ高く、知らぬ間に凡才の師匠を追い越して、これまた、僕の協力者として無くてはならぬ人となって

いた。1985年の新年早々に、内々に移籍受諾の返事をもらったと記憶している。

最後の1人が廣岡秀一氏であった。当時、名大教育学部の博士課程後期2年在学中で、コンピュータに強い社会心理学の院生、ということで名前も顔も知っており、言葉を交わしたこともあったが、友人に候補者を依頼して推薦されるまで、迂闊にも僕の頭に浮かんでこなかった。得難いキャラクターの持主で、現在の学科の雰囲気づくりにどれほど貢献してもらっているか、計り知れない。承諾を得たのは、確か6月に入ってからのことだったと記憶している。

こう書くと、いかにも順調に人選が進んだように見えるが、本当は必ずしもそうではない。いろいろな曲折を経ての結果である。ただ、今振り返って思うに、この現在のスタッフが、結果的に最高の人的構成になったと自信をもって言える。

こうして、4人の内諾を得て、いよいよ本格的に、そして具体的に、学科創りに取りかかることにした。そしてまた、学園側に一任していたメディア論関係の田村新次、遠藤雄久のお2人の先生についても、ほぼ同じ頃承諾を頂いた。ただ、実際にこの6人の人達が着任するのは、これより更に2年後の1987(昭和62)年、すなわちコミュニケーション学科開設の時である。



コミュニケーション学科の部屋の設計・配置、コンピュータやAV機器の機種選定、机や椅子の種類や大きさや色、絨毯の色や厚さ、その他の備品や消耗品などの一切、さらに設置基準を満たす5千冊の図書と25種類の専門雑誌の選定など、今から思えば気の遠くなるようないちいちの作業も、みんな我々6人でやったのだった。安藤事務局長以下、短大事務局の方々や学園本部の大月純也氏の、好意的かつ献身的な協力とともに、我々の要求をほぼ全面的に認める決断を下された学園当局には、ただ感謝あるのみである。

コミュニケーション学科が入る建物は、当初、記念会堂に予定されていたと安藤局長から伺ったことがある。今の食堂の位置である。しかし曲折を経て、当時清明館の2階にあった食堂を移転することで、その跡地にわがコミュニケーション学科が入ることとなった。1985年2月頃の決定ではなかったかと記憶する。

3月5日、その時点で内諾を得ていた永田、新美両氏を交えて、山田先生の研究室で、4名が初めて顔を合わせた(僕はまだ専任教員ではないので、自分の研

究室がない)。その時の議題は、およそ決まりつつあったカリキュラムの詰めの作業(担当者、授業方法、必修・選択の別、開講学年・学期、単位数、卒業総単位数など)、それに観察法などの研究法演習や電子計算機基礎演習の時間配当と実施形態の相談であったが加えて、この席で早くも僕は、学科の部屋の基本設計・配置と、設備・備品のリストアップを各自が考えるよう要求している。

3月9日、僕が描いた設計図案をたたき台に、その後各自が案を出しては、更新していった。現地の食堂を検地・検分し、実測しては手直したものである。新美氏と僕は、まだコロニーの同じ研究室の同僚の関係にあったので、図面を引くにも相談することができて随分便利であった。彼の実務的協力なくしては、これほどスムーズに運ばなかったであろう。4月3日の4人の会合の席で、我々としての理想案を決定し、学園側の要請のあり次第、いつでも学科案を提出できる準備は整えた。この時の案では、コンピュータ室は2階に置かれることになっており、また、現在のS1、

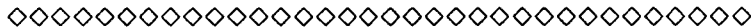
においても、1961（昭和36）年開設になる既設の3学科はこの地方での高い評価をえてきているので、このハードの部分での審査は心配していなかった。

こうして、冒頭に述べた、大学設置審議会による審査の日を迎えた次第であった。さらに、その9日後の1985年11月8日、今度は私立大学協会審議会の審査が同じく文部省私学行政課で行われた。私大審判は2名の委員（私立大学理事長）、学園側からは前回とほぼ同じ6名が出席した。ここでは学生確保の見通しや学園の財政状況の説明など、経営に関する審査なので、僕はただ同席していればよかった。

1986年3月22日、第1年次審査合格の通知が届いた。同じく3月、僕は、11年間勤めた愛知県コロニーを

退職して、1986（昭和61）年4月愛知淑徳短期大学に着任した。1年後の新学科開設に向けて、その準備に専念するためである。山田先生を除く他の諸氏よりも一年早く、本学に来たのであった。これまで、喫茶店や短大の事務室などで打ち合せをしていたような流浪の生活ではなく、本拠地を持てることはお互いの連絡にととても都合のよいことであった。こうしてやっと、一年半近く続いた公私同居の二重生活に終止符を打つことになった。

学内では一般教育科に籍を置いて、心理学の講義を担当するかたわら（他の教員の持ちコマ数の半分にしていた）、当面は、第2年次審査の書類申請に必要な作業をすることであった。



第2年次審査の書類申請締切日は、1986年6月30日であった。

この審査の主眼は、カリキュラム、教員組織、図書など、学科設置に係わる、いわゆるソフトの部分のチェックである。とくに、教員審査が中心で、研究業績の量と質、それに基づく資格（教授、助教授、講師）の妥当性の評価、および、業績との関連による科目担当の可否などが、きわめて厳格にチェックされる。この教員審査は、学科専任スタッフはもちろんのこと、学科の専門科目を担当する非常勤講師、さらに一般教育科目担当の、短大専任の教員のみならず非常勤講師に到るまで、つまり、コミュニケーション学科の学生に講義をする可能性のあるすべての担当者が対象になるものである。

履歴書、教育研究業績書、職務調書、就任承諾書、所属長の承諾書が、個人ごとに整えられねばならない。8名の学科専任教員候補は別として、非常勤の先生方にもこの面倒な書類を提出していただくことは、大変心苦しかったが、規則とあらば致し方なく、お願いするしかなかった。

これより前、3月18日付で、文部省より、第1年次審査合格に係わる「留意事項」が発せられた。主にカリキュラムの充実に関することで、つまり、第2年次審査申請時までには、改善しておくことの要請（実際は命令）である。この結果、文化人類学、人間学、文化システム論、認知心理学が基礎科目として新たに加わることとなった。

9月9日、教員審査の結果の発表が、文部省高等教育局企画課で行われた。学園側からは、小林・学園本

部長、安藤・短大事務局長の2人が出席された。

教員審査は、大学設置審の専門委員会によってなされるが、コミュニケーション論およびメディア論科目は、社会学の委員会で、コンピュータ関連科目は情報工学で、心理学の各科目は心理学で、統計学は数学の専門委員会というように、それぞれ別個の委員会によって審査が行われる。したがって、同じ人物が複数の科目を担当していると、異なる委員会にまたがることもあり、Aの科目は合格だがB科目は不合格という事態が起こりうる。これは、同一の委員会で審査されても同じで、業績との関連で科目担当者としての適・不適が判定されるので、例えば「〇〇心理学」の担当はよいが「××心理学」の講義者としては不適任、ということもあるわけである。

こうして、詳細はご本人のプライバシーに触れるので述べるわけにはいかないが、悲喜こもごもの判断が下された。さらにこの時点で、「今後のメディアの進歩と、コンピュータのコミュニケーションへの利用を予想すると、こうした科目が少ないので、実習を含めて再考されたい」旨の留意事項が加えられた。この結果、電子計算機基礎演習（2）と、電子メディア論が新たに加わることとなった。

こうしたあわただしい事態のさなかの10月2日、大学設置審議会実地調査が行われた。申請書類の通りに諸計画が進捗しているかどうかを、文部省側が実際に調査しに来るわけである。井出委員（千葉大学学長）と文部省の事務官の2名であったが、11時から3時までの視察であった。僕は、午前中10分間程学生指導と教科構成について説明し、午後はコミュニケーション

学科の教室となる施設を、授業内容の説明を加えながら案内した。園芸学専攻の学長で、理科系ということもあってか、心理学における実験とはどうやるのかとか、実証されたと判断できるには何が必要か、など歩きながら盛んに質問されたことを覚えている。この学科に興味をもって下さっていることが伝わってきて、これならうまくいくぞ、と心中密かに喜んだ。この時点で、夏休み早々から始まった工事はほぼ終わっていたが（完了したのは11月下旬）、パソコンや、AV機器など設備・備品類は、未だ搬入されていなかった。

また翌日には、文部省私学行政課による「寄付行為変更に関する宅地調査」が行われた。

ともあれ、こうした日々を無事に済ませてホッと一息ついたものの、事態は最後の大きな山場にさしかかっていた。すなわち、先の教員審査で不合格となった人の担当科目の交替要員を、大至急見つけて補充しなくてはならないのである。10月17日が、その文部省への書類提出締切日であった。これに該当するのは、一般教育科目も含めて全部で10科目6人であった。9月9日の、審査の結果通告より僅か1ヶ月余りしか時

間の無い中で、僕が受け持ったのは4人（5科目）であった。他の科目の人選は、学園側に委ねた。ともかく、遅よく見つけて本人の了承をとっても、それから手間のかかる書類を作成してもらい、さらにそれを正規の印刷にまわさねばならない。いくら急いでも、この間10日は見ておかねばならないので、人探しに当てられる期間は25日が限度であった。この時ほど、人脈の有難さを痛感したことはなかった。僕の友人や先輩・先生はもとより、妻の知人までも総動員しての、短期決戦であった。

この大騒動の過程で得た教訓は、生意気な表現ではあるが、大学設置審議会の専門委員の目は、やはり節穴ではないということであった。つまり、本人から提出された業績を予め僕が拝見した段階で、これは危ないなと思った人は、やはり審査で落ちていたからである。後で慌てふためかかないためには、最初から、該当科目に確実に合格しそうな人を用意すること、あわよくばという甘い期待で人選しないこと、これに尽きるようである。



12月23日、待望久しかったわがコミュニケーション学科の、設置許可の通知がもたらされた（ただし、また1人の不合格者が出、翌年1月18日までに交替要員を補充・書類提出を義務づけられていた）。これで、晴れて愛知淑徳短期大学の4番目の学科として、世間に公表できることとなったわけである。つまり、1987（昭和62）年4月の開設を前提とする、学生募集が認められたわけであった。

この通知を受けて、学園として、新年早々の1月9日、愛知県内の高等学校を中心としたコミュニケーション学科の入試説明会を、市内のホテルで行った。高校の進路指導主任を主たる対象としたパーティーであったが、新設学科の責任者として開設の趣旨説明をしたときは、正直なところヤレヤレという気持ちであった。

ところで実は、愛知淑徳高校から進学してくる、いわゆる内部推薦の生徒については、既に前年の12月20日に試験を実施していた。この面接試験の席で、某受験生（名前は分かっているが、あえて秘す）から、もしも認可されなかったらどうするか、つまり、我々受験生はどうなるのかとの質問を受けた。これにはさすがに返答に困ったが、間違いなく認可されるから、無

用の心配はしないで冷静に残りの高校生活を過ごしてほしいと、なだめるような言い訳をしたことを覚えている。もちろん僕には、認可される確信はあったので笑って受け答えたが、受験生の身になってみれば無理からぬことだと同情した次第であった。この時の小論文の問題が「話せば分かるか」であった。

これは、年が明けて1月17日に行われた、外部の高校からの推薦入試の小論文の問題「目は口ほどにものを言うか」とベアになっており、記念すべき第1回のコミュニケーション学科の入試の特色を、なんとか出したいという苦心の現れであった。

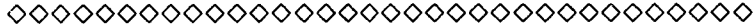
ところで、再三述べるように、この時点で本学にいたのは、山田先生と僕だけで、この問題も2人の合作であったが、内部推薦入試の直前になって、山田先生が足首を骨折されるという、まさに青天の霹靂ともいふべきアクシデントが勃発したのであった。これには正直のところ参った。僕は、試験監督の経験はあったが、面接試験者の経験は無く、面接試験官の経験者である彼女にいろいろ教えてもらえばいいや、と大船に乗ったつもりでいたので、これは大変なことになってしまった。推薦入試の面接は、2人がベアを組んで行うのだが、コミュニケーション学科の面接担当者は、

学科の誕生まで

我々2人をそれぞれのペアの責任者として、他学科の先生を応援に頼んで2組のチームを作る予定であったが、それができなくなってしまったわけであった。やむをえず、僕の組を除くもう1組は、他学科の先生だけをお願いすることになったが、内推、外推の両試験とも変則形態となってしまった（もちろん、次年度からはコミュニケーション学科専任の教員だけでまかな

えるようになった）。

これに続いて、2月8日には、他学科と同じ日程でいわゆる入学試験を行った。こうして、慌ただしかつた新設年度の入学試験もどうにか一段落を迎えたのであった。後は合格者の判断を待つだけで、入学式に何人集まるか、折るような気持ちの毎日であった。



入学式当日、姿を現した第1期生は134名であった。ここに、新たなる歴史の幕が切って落とされたのである。時、1987（昭和62）年4月3日（金曜日）のことであった。この日はまた、2年近くも就任を待っておられた新任の先生方にとっても、また、仲間を待ちこがれていた僕と山田先生にとっても、このうえない感激の日であった。

5月23日、学科新設のお披露目のパーティーが、県下の大学・短大、高校、教育機関などの関係者を招いて、記念会堂で行われた。スライドを使った学科紹介は好評のようであったが、これはまた、わが学科の全教員集まっただけの初仕事でもあった。

1988年4月5日、第2期生として121名の仲間を新たに迎えた。ここに、名実ともに、わがコミュニケーション学科は成立したのである。

そして、6月16日、コミュニケーション学科完成年度の今年、文部省による最後の実地調査が行われた。大学設置・学校法人審議会の2つの分科会から、大西委員（関西大学学長）、松山委員（同志社大学総長）の2氏と、文部省の2人の事務官が、本学へ調査視察に来られた。僕は、学科設置に係わる留意事項の履行状況について15分程説明し、午後からはコミュニケー

ション学科の施設を案内した。この日は木曜日で、2年生は丁度ゼミの最中であったが、委員の先生方はS6（東）教室の異文化間コミュニケーションのゼミの部屋に入って、しばらく視察しておられた。また、コンピュータ室では、オープン利用の日にもかかわらず満席近い状況にしきりに感心しておられた。もっともこれは、種を明かせば、1年生のワープロ実習の試験が近づいていたためではあったが・・・。

すこぶる良好な講評のうちに、この調査も無事終わった。今後、コミュニケーションという名称の学科が全国の大学・短大に出来ることが予想されるが、愛知淑徳短期大学のコミュニケーション学科がその創始として、モデルの役割を果たしてもらいたいという、この上ない激励の言葉をいただいた。小林学長の、うれしそうな顔が印象的であった。

事実、今年（1988年4月）東京女子大と北海道東海大にコミュニケーション学科ができたし、また準備をしている大学や、我々のところに問い合わせや視察に来た大学・短大も二、三ならずあることも事実である。今後どのような展開をみせるか、興味のわくところである。



さて、長々と綴ってきた僕の随想も、これで終えることとする。これから後の歴史は、第1期生をはじめとする後続の学生諸師と我々教職員との全員で創っていくものである。その活動の基盤となる「愛知淑徳短期大学コミュニケーション学会」もこの4月発足して、条件は整えられつつある。

わが愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の、輝かしき伝統の形成に向かって、各人一層奮闘努力せよ！！

1988年8月10日